

2011年8月30日 中四国IDEセミナー

大学生の自律的学習  
－東大CRUMP調査からの検討－

両角亜希子（東京大学）

# 発表の内容

---

- ▶ データの説明
- ▶ 自律的学習とは何か
- ▶ 誰が自律的学習者になるのか
- ▶ 自律的学習の効果とは
- ▶ 大学教員はどのように見ているのか

# 発表に用いるCRUMP調査

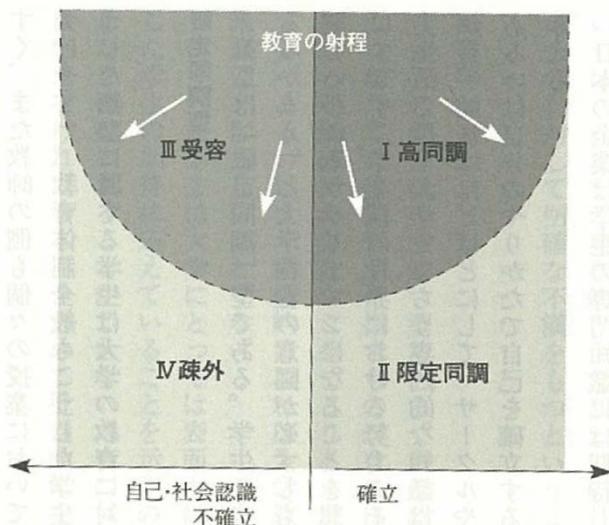
調査	内容
①全国大学生調査	2007年に実施。全国127大学の大学生、48233名が回答。
②全国大学生調査追加調査	2009年に実施。調査①に回答し、追跡調査のへ協力をした者に対してWEB調査で実施。3361名が回答。 調査票は、A.最終学年に在籍(1220名)、B.その他学年に在籍(1220名)、C.就職(347名)、D.大学院在学中(479名)、E.その他(95名)にわけて質問を行った。 今回は質問票B(在学生)を主に用いて分析を行った。
③大学教育に関する職業人調査	2009年に実施。平成18年事業所・企業統計調査リストからランダムに事業所をサンプリングし、そこに勤務する大卒職業人に対して行った。25203名が回答。
④全国大学教員調査	2010年に実施。「全国大学職員名簿・2006年版」から約10分の1(16,991名)を抽出し、郵送法で実施。5311名が回答。 このうち、大学名を記載した回答者は3032名。

※各調査の調査票や報告書は、東京大学 大学経営・政策研究センターのWEBで確認できる。

## 1. 自律的学習とは何か

# 『大学の教育力』 (\* ) の学生類型

- ▶ 軸1「学生の自己・社会認識の確立の度合い」
  - ▶ やりたいことはあるか
- ▶ 軸2「その学生が所属大学の教育の射程に入るか否か」
  - ▶ やりたいことと大学教育が合っているか



図表 0-1 大学教育の射程と学生

【高同調型】: 学生自身の自己・社会認識が確立しており、大学教育の意図と将来展望が一致しているタイプ

【独立型】: 学生自身の自己・社会認識が確立してはいるが、このから生じる「かまえ」と大学教育の意図が一致していないタイプ

【受容型】: 学生自身の自己・社会認識は確立しておらず、大学の授業の自己への意味は不明確である。しかし、むしろ不明確だからこそ、大学教育に一定の期待を持ち、その要求に従おうとするタイプ

【疎外型】: 自己・社会認識が未確立で、大学教育の意図とも適合度が低いタイプ

# 学生類型

【軸1】将来のやりたいことの明確さ  
「卒業後にやりたいことは決まっている」

Yes  
(明確)



【軸2-1】授業とやりたいことの関係  
「大学での授業はやりたいことと密接に関わっている」

Yes  
(関係している)

No  
(関係していない)

高同調型

独立型

No  
(不明確)



【軸2-2】授業への期待  
「授業を通じてやりたいことを見つけたい」

Yes  
(期待している)

No  
(期待していない)

受容型

疎外型

- ・金子元久 2007『大学の教育力—何を教え、学ぶか』ちくま新書をもとに作成
- ・Yes:「よくあてはまる」+「ある程度あてはまる」 No:「あまりあてはまらない」+「全くあてはまらない」
- ・調査①(全国大学生調査)から作成

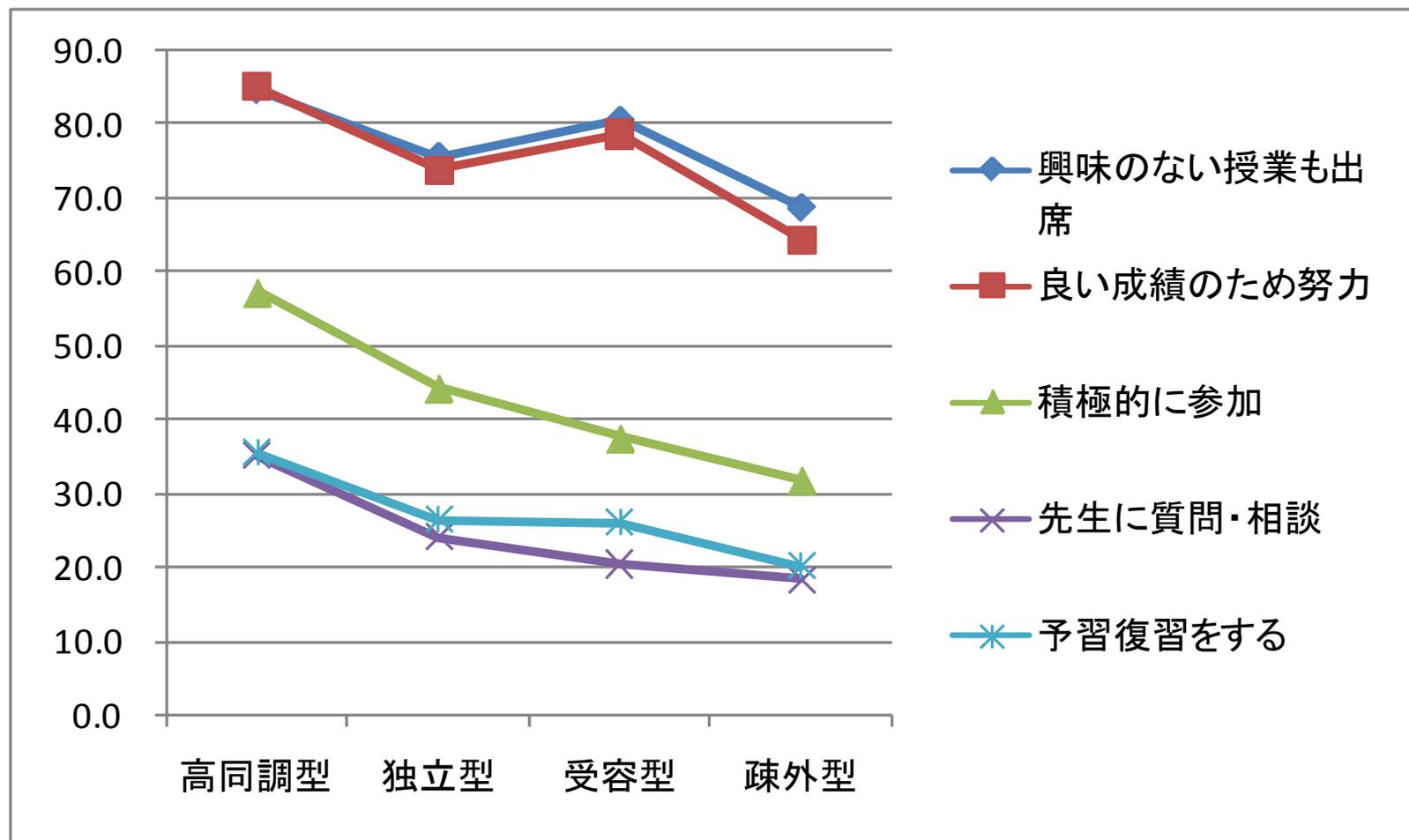
# 学生類型別の生活時間（週あたり）

	学期中						休暇中
	授業・実験	授業関連学習	授業と関係ない学	サークル・クラブ	バイト・仕事	合計	学習時間
高同調型 (N=18979)	18.0	6.7	4.4	4.5	8.0	41.5	6.6
独立型 (N=8586)	15.2	5.2	4.5	5.0	9.9	39.7	5.2
受容型 (N=13270)	17.3	5.5	2.9	4.6	8.1	38.4	4.3
疎外型 (N=5621)	14.5	4.9	3.6	4.6	9.6	37.2	4.0

- 高同調型の授業・実験、授業関連学習が最も長く、疎外型でもっとも短い。
- 休暇中の学習時間についても同様の傾向。
- 授業と関係ない学習については独立型が最も多い。

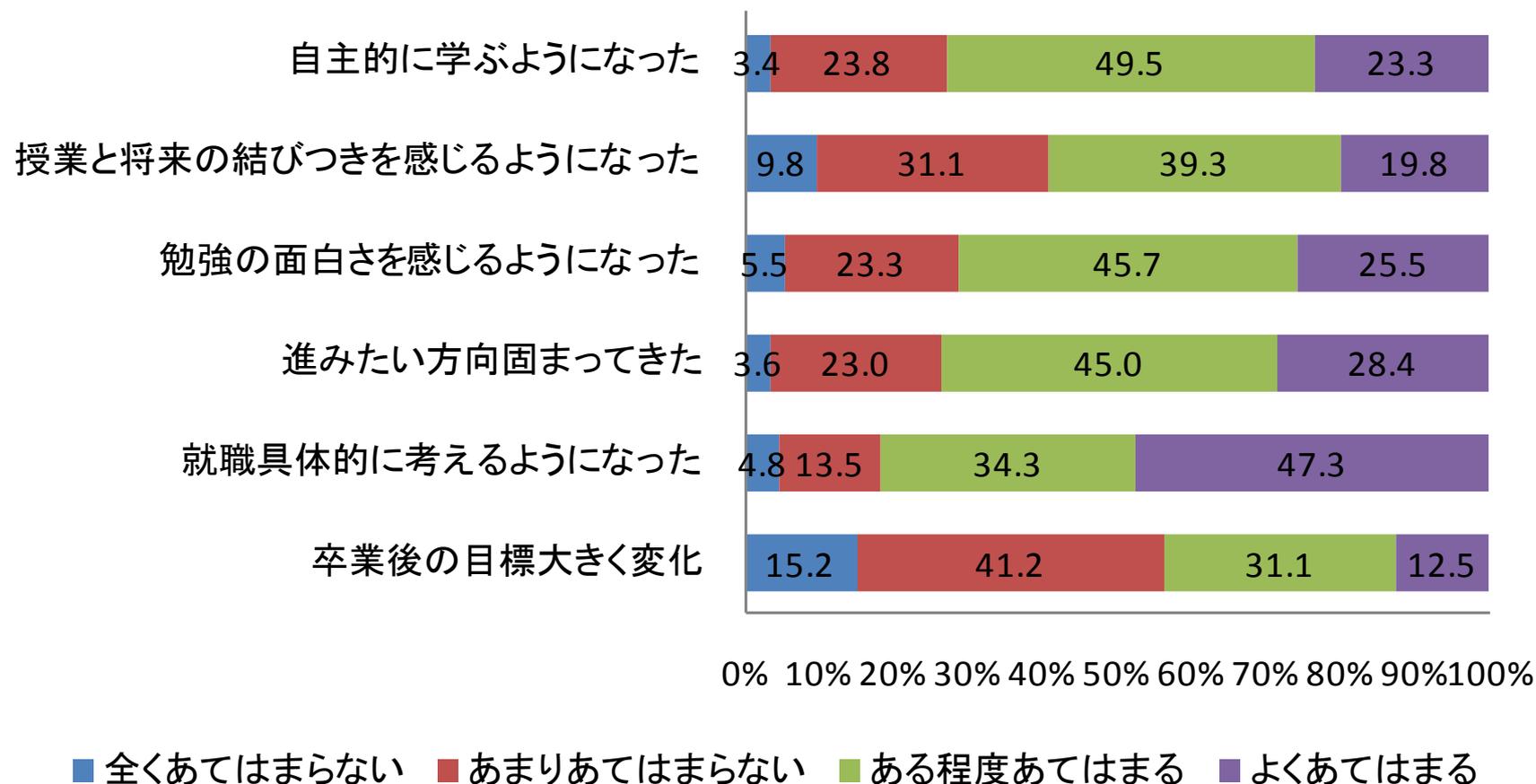
（調査①より作成）

# 学生類型別の授業への取り組み



※4件法でたずねた「あてはまる」「ある程度あてはまる」の合計値。調査①より作成。

# 過去1年間の変化について



※調査②(在学生、N=1220)より作成。

# 「自主的に学ぶようになる」とは

## ▶ 過去1年間の変化の相関係数

	勉強の面白さを感じるようになった	授業と将来の結びつきを感じるようになった	進みたい方向固まってきた	就職具体的に考えるようになった	目標大きく変化
自主的に学ぶようになった	0.530	0.379	0.318	0.116	0.095

※調査②(在学生、N=1220)より作成。

- 勉強のおもしろさを感じる、授業の意味づけができた、将来の方向が定まるなどの影響をうけて、自主的に学ぶようになるのではないか。
- 学生の内発的な変化、インパクトをどのように引き出すのかが重要。

# 分野別にみた規定要因

		人 社 教 芸 $\beta$	理 工 農 $\beta$	保 健 ・ 家 政 $\beta$
(定数)		***	***	***
過去1年間 の変化	勉強の面白さを感じるようになった	0.391 ***	0.400 ***	0.436 ***
	進みたい方向固まってきた	0.128 ***	0.088 *	0.075
	授業と将来の結びつきを感じるようになった	0.220 ***	0.112 **	0.014
	研究室・ゼミに入った	0.092 **	0.080	0.035
過ごす場所	研究室	-0.016	0.111 **	0.048
	図書館	0.056	0.097 **	0.186 ***
取り組み	授業出席率(2007年時点)	0.005	-0.033	-0.059
サンプル数		434	352	174
調整済み決定係数		0.384	0.309	0.267
F値		39.593 ***	23.503 ***	10.034 ***

(注)\*\*\* 1%水準、\*\* 5%水準、\* 10%水準で有意。

従属変数:(過去1年間に)自主的に学ぶようになった

※調査①と調査②(在学生)より作成。

---

## ▶ 分野ごとの共通点

- ▶ 「勉強の面白みを感じる」ことにより、自主的に学ぶようになる。
- ▶ 授業出席率の効果はない。ただ座っていても…。

## ▶ 人社交芸

- ▶ 将来の方向性や授業の意味づけ(やりたいこととの関連)を実感するようになるると自主的に学ぶようになる(理工農でも同様)。
- ▶ 研究室・ゼミに入ることの効果が見られる。

## ▶ 理工農

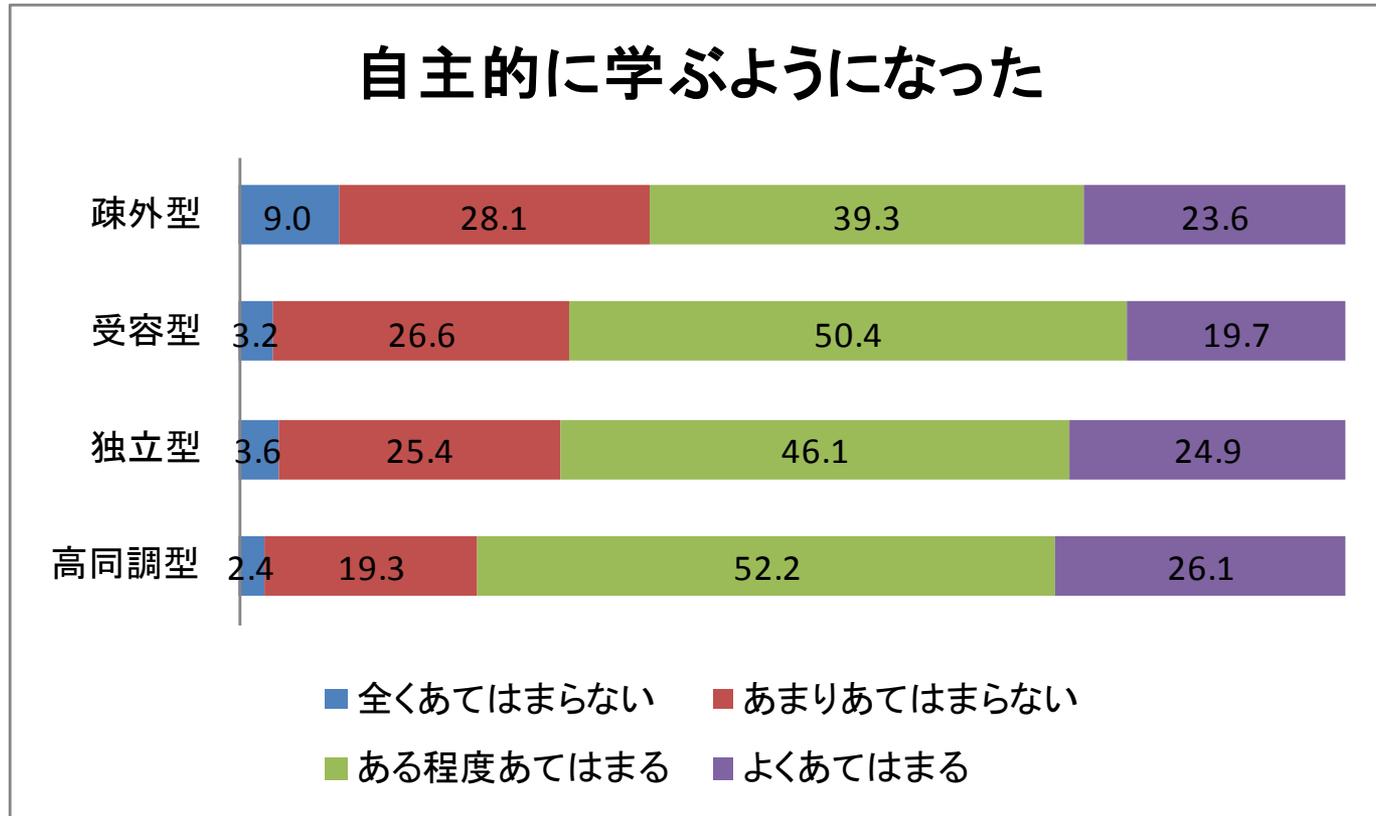
- ▶ 居場所効果(コミュニケーション効果)

## ▶ 保健・家政

- ▶ 将来の方向性が明確の学部のためか、将来の方向性や授業の意味づけの影響は見られない。
- ▶ 図書館とプラス(自主的に学ぶようになった学生が図書館をよく利用する関係が見られる)。

## 2. 誰が自律的学習者となるのか

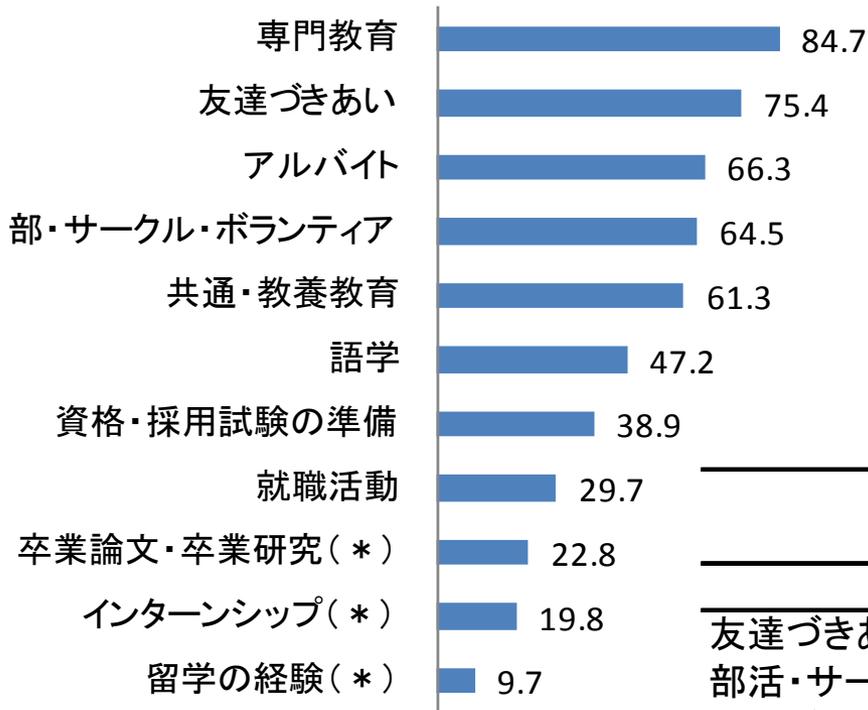
# 学生類型×自主的に学ぶようになった



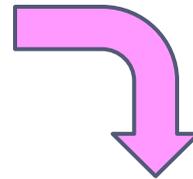
※調査①と調査②(在学生、N=1220)より作成。

※2007年時点の志向性の影響も大きいですが、それだけで決まっているわけではない。

# 在学中、何に力を入れたか



経験率が低いもの(\*)をのぞいて、因子分析を行い3つの因子を抽出。

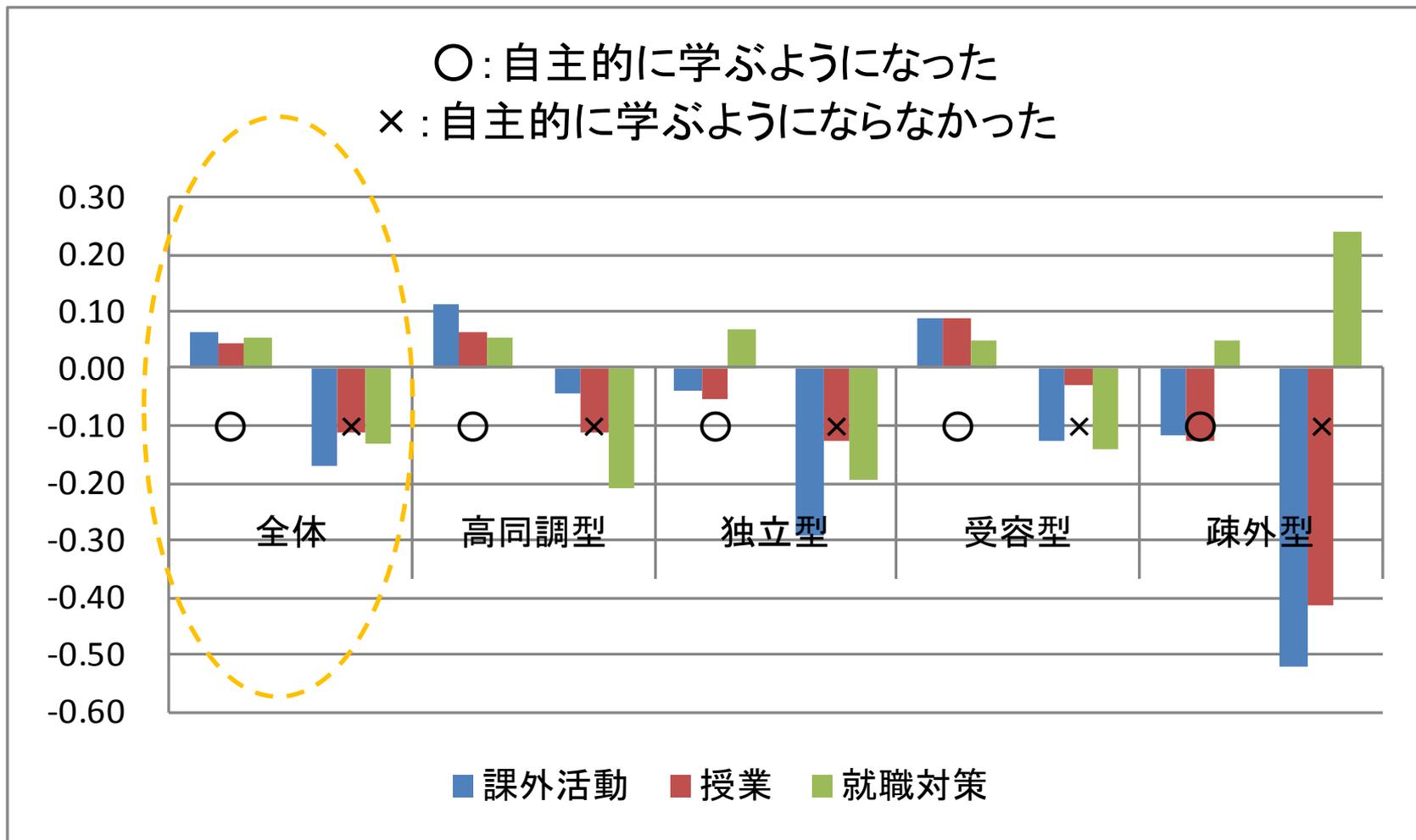


因子	1 課外活動	2 授業	3 就職対策
因子負荷量	10.0	18.4	24.9
友達つきあい	0.731	0.140	0.135
部活・サークル・ボランティア	0.427	-0.011	-0.051
アルバイト	0.253	0.065	0.140
共通・教養教育	-0.035	0.673	-0.035
語学	0.052	0.368	0.030
専門教育	0.071	0.227	0.075
就職活動	0.107	0.015	0.487
資格・採用試験準備	0.003	0.070	0.484

因子抽出法: 主因子法 回転法: Kaiser の正規化を伴うバリマックス法



# 力を入れた活動×自主的に学ぶようになった



# 重回帰分析－総合的に検討

従属変数		進みたい方向 固まってきた		勉強の面白 さを感じるよ うになった		授業と将来の 結びつきを感じ るようになった		自主的に学ぶ ようになった	
		$\beta$		$\beta$		$\beta$		$\beta$	
(定数)			***		***		***		***
力を入れた 活動	課外活動	0.087	***	0.111	***	0.129	***	0.080	***
	授業	0.032		0.099	***	0.035		0.102	***
	就職対策	0.219	***	-0.027		-0.034		0.058	**
	読書(2007年時点)	0.073	***	0.052	*	0.003		0.085	***
相談相手	教員相談	0.070	**	0.165	***	0.135	***	0.128	***
	職員相談	0.023		-0.027		-0.023		-0.057	**
	友達相談	0.035		0.059	**	0.073	**	0.029	
環境変化	研究室・ゼミに入った	0.102	***	0.090	***	-0.051	*	0.135	***
学習習慣	高3時1日の勉強時間	0.104	***	0.057	**	0.099	***	0.104	***
2007年時点 の志向	卒業後やりたいこと決まっている	0.132	***	0.053		0.121	***	0.066	**
	大学での授業はやりたいことと関係	-0.060	*	0.068	**	0.160	***	0.072	**
	授業でやりたいこと見つけたい	0.028		0.076	***	0.050	*	0.004	
調整済み R2 乗		0.134		0.109		0.136		0.116	
F 値		16.346		13.205		16.681		14.008	
		***		***		***		***	

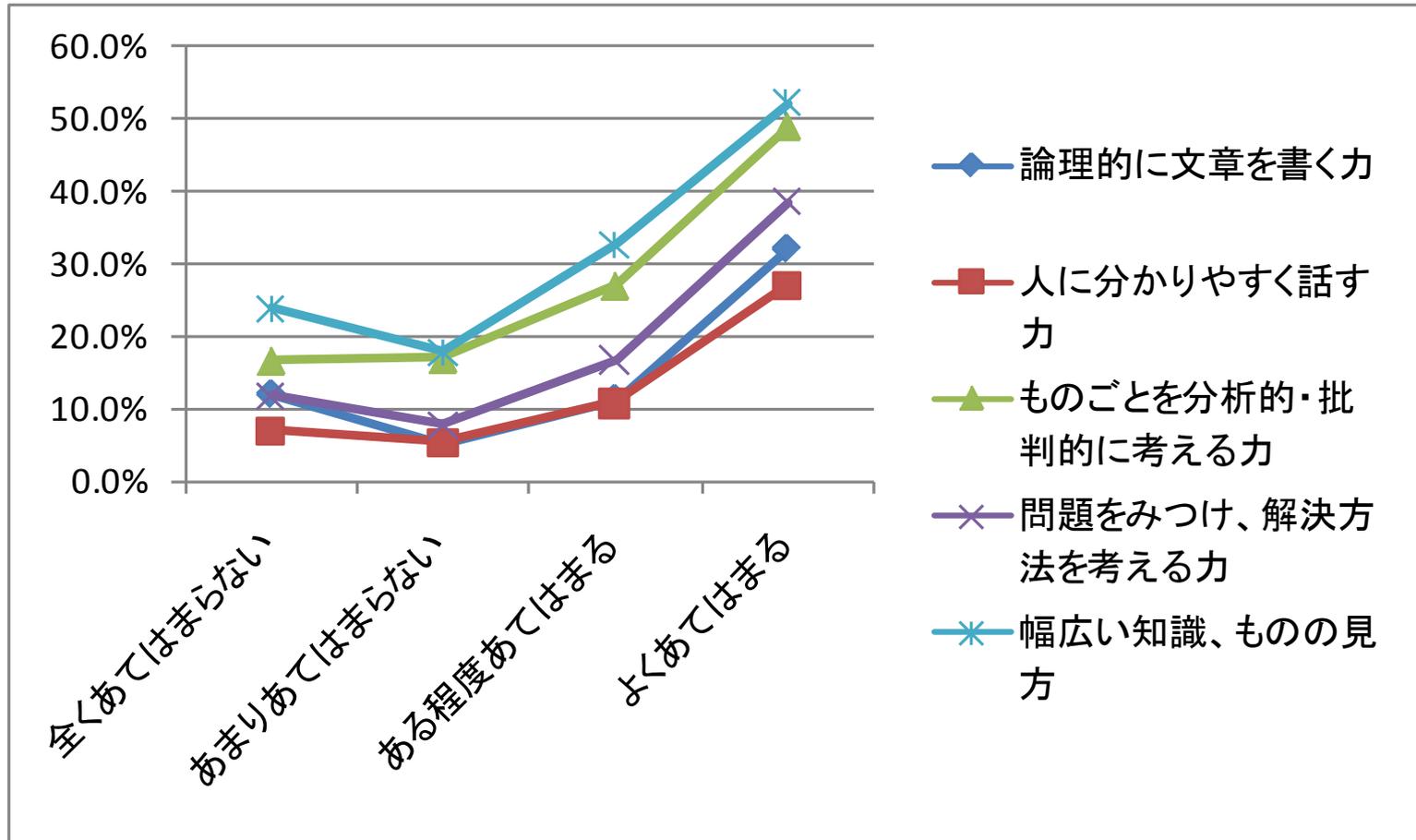
(注)\*\*\* 1%水準、\*\* 5%水準、\* 10%水準で有意。

※調査①と調査②(在学生、N=1220)より作成。

- 
- ▶ **積極的に大学生を送ることの効果**
    - ▶ すべてに影響を与える課題活動効果
    - ▶ 授業: 授業の面白さ、自主的学習には影響しているが、進みたい方向の明確化、授業とやりたいことの関連には影響を与えていない。(力を入れている割に効果は限定的?)
    - ▶ 就活、読書も一定の効果
  - ▶ **教員相談、友達相談の効果**
    - ▶ とくに教員相談の効果の大きさ。いずれの変数にも影響。
    - ▶ 職員の効果—困難を抱えた学生の受け皿
  - ▶ **研究室、ゼミの効果**
  - ▶ **学習習慣の影響**
  - ▶ **2007年時点の志向性の影響—行動に影響**

### 3. 自律的学習の効果とは

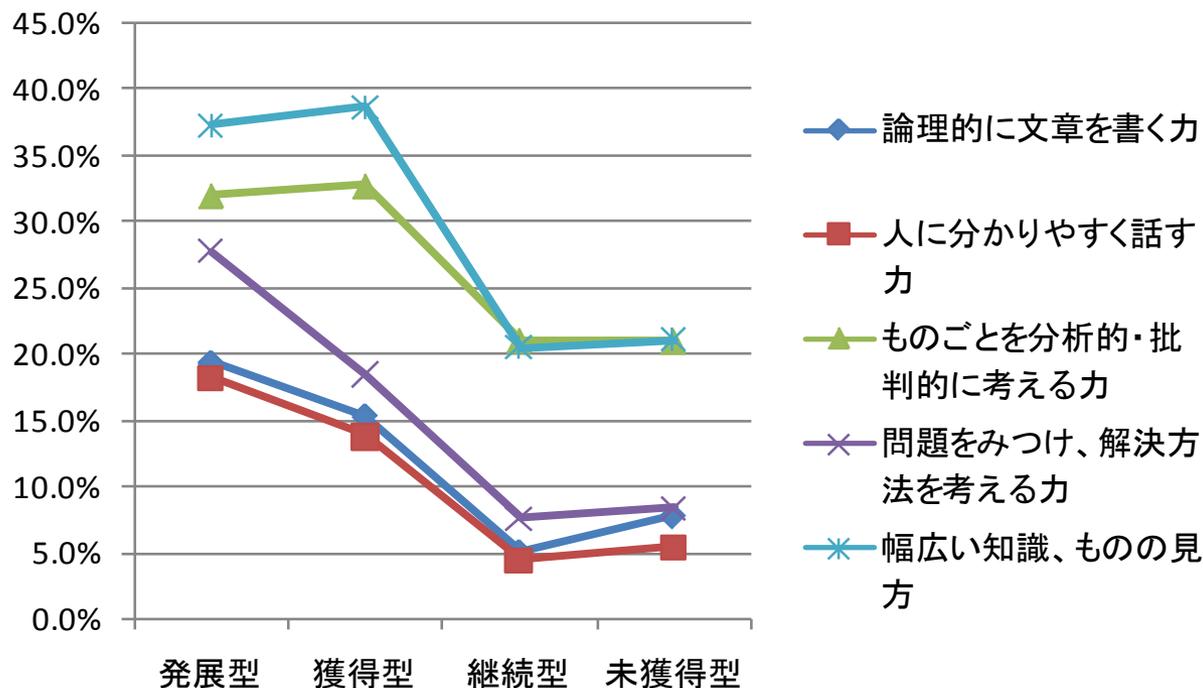
## 自主的学習 × 在学中の能力の伸び



※在学中にどの程度伸びたかを「伸びていない」「あまり伸びていない」「ある程度伸びた」「伸びた」の4件法でたずねたうちの「伸びた」と答えたものの割合。

# キャリア意識の変化×在学中の能力の伸び

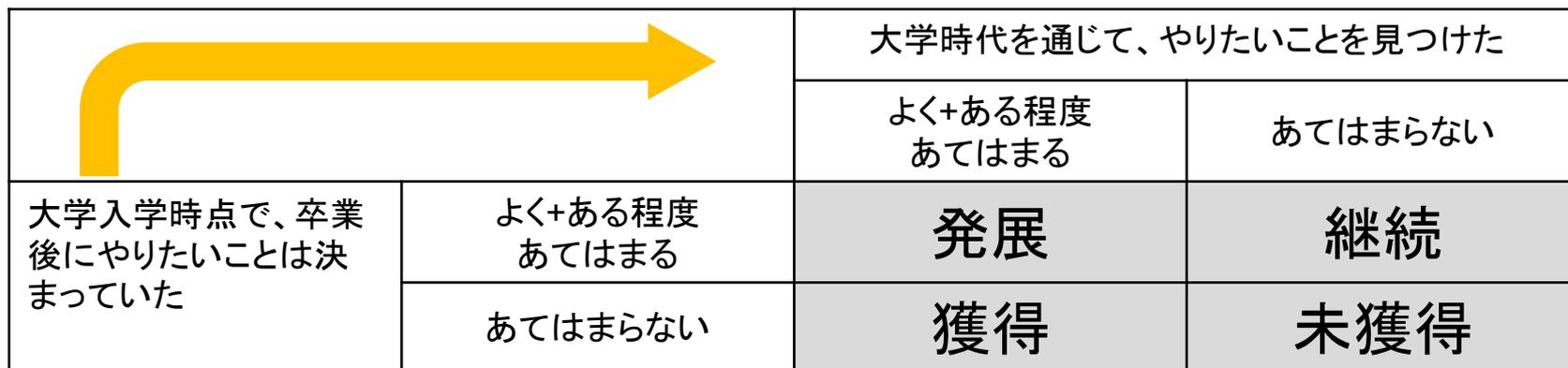
		卒業後に進みたい方向が段々と固まってきた	
		よく+ある程度 あてはまる	あまり+全く あてはまらない
大学入学時点で、卒業後にやりたいことは決まっていた	よく+ある程度 あてはまる	<b>発展 (41.5%)</b>	<b>継続 (12.8%)</b>
	あまり+全く あてはまらない	<b>獲得 (32.0%)</b>	<b>未獲得 (13.6%)</b>



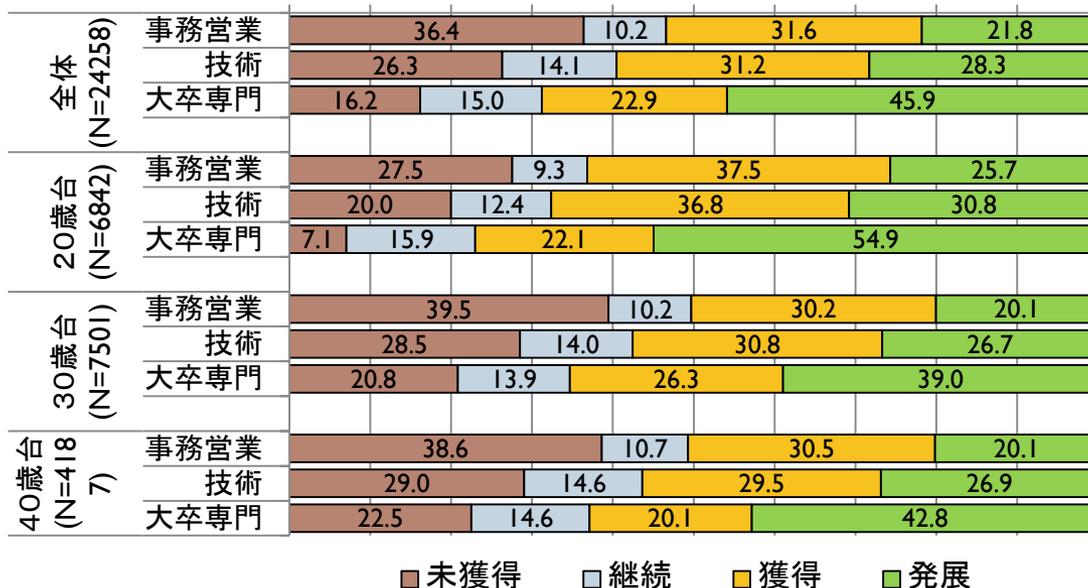
※在学中にどの程度伸びたかを「伸びていない」「あまり伸びていない」「ある程度伸びた」「伸びた」の4件法でたずねたうちの「伸びた」と答えたものの割合。

※調査②(在学生、N=1220)より作成。

# キャリア意識が職業生活に与える影響



0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%



▶ この推移パターンが、卒業後の職業生活にどのような影響を及ぼしているか。

注)「全体」は全年齢層を含む。50歳台以上の図は省略。

※調査③(職業人、N=25203)より作成。

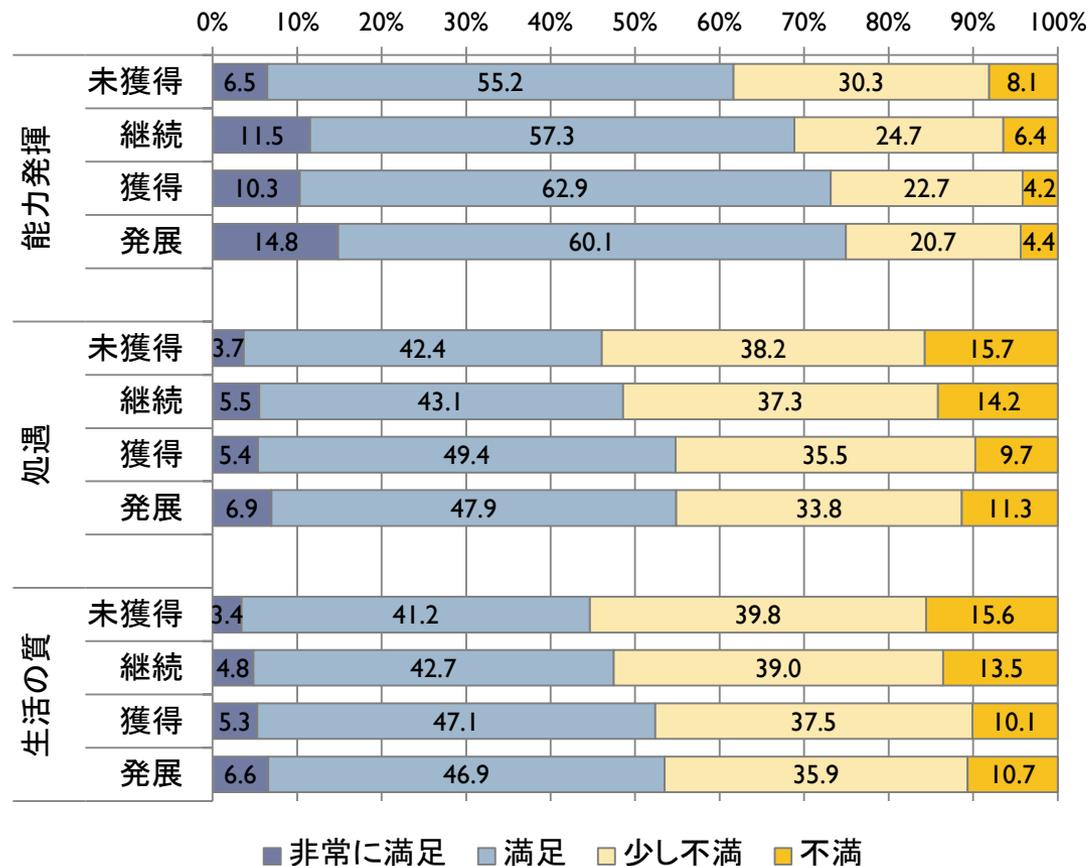
# キャリア意識と仕事満足度

## ▶仕事への満足度

「現在のお仕事について、以下の点でどのように評価しますか。」

(「不満」=1～「非常に満足」=4)

- 自分の能力を生かすうえで
- 処遇のうえで
- 生活の質のうえで



- ▶ 獲得型と発展型の満足度が高い
- ▶ 結果は省略するが、学歴や分野、処遇、仕事内容などを統制しても影響は残る。

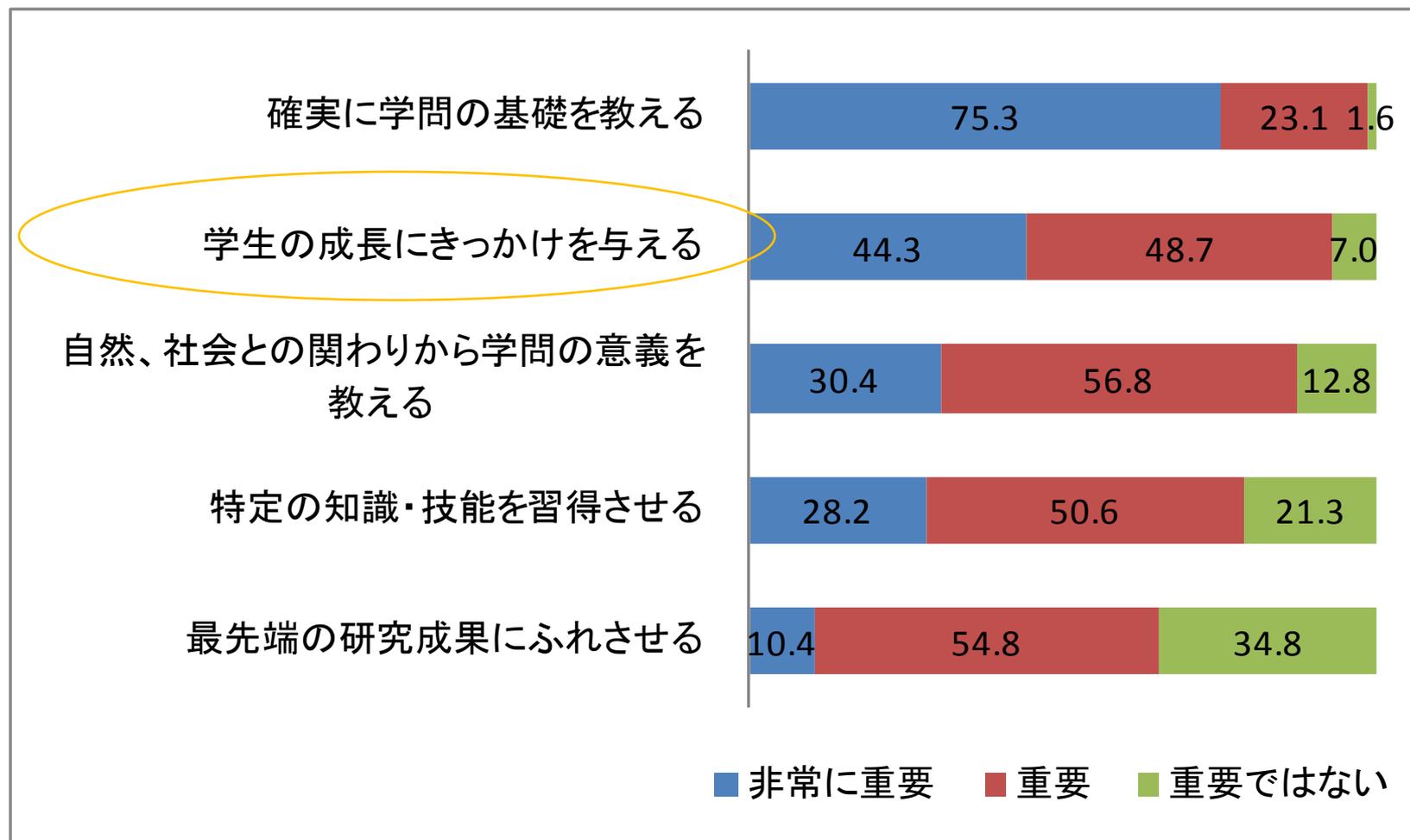
# 自律的学習の効果

---

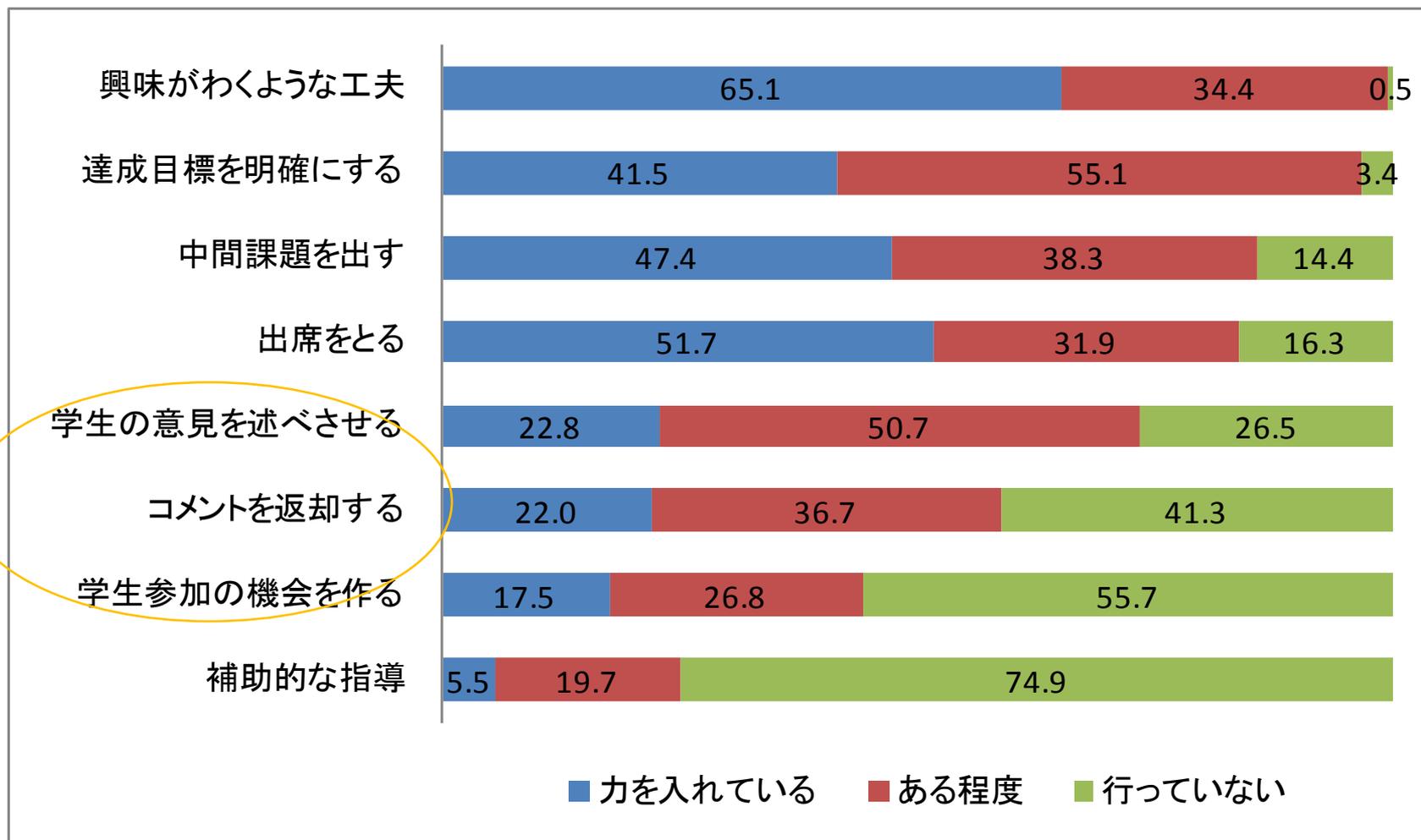
- ▶ 卒業後の職業生活においても影響を与える。
- ▶ とくに、重要なのは、獲得＞継続の関係。
  - ▶ つまり、継続(大学にやりたいことがあって入学しても、大学教育で何らかのインパクトを受けなかった学生)よりも、獲得(大学入学時にやりたいことはなかったが、大学自体に何らかを得たと実感できた学生)の方が、獲得した能力、職業生活での満足度が高い。
  - ▶ カレッジインパクトを与えることの重要性の再発見。

#### 4. 大学教員はどのように見ているのか

### 授業の力点（教員、学部生対象の授業のみ）①



# 実施している授業の方法



# 授業の力点と方法の相関

	興味がわくよう工夫	出席をとる	中間課題を出す	達成目標を明確化	学生の意見を述べさせる	コメントを返却する	学生参加の機会をつくる	補助的な指導
確実に学問の基礎を教える	0.034	-0.012	0.022	0.118	-0.005	0.028	-0.060	0.015
学生の成長にきっかけを与える	0.232	0.090	0.116	0.125	0.242	0.161	0.228	0.050
自然、社会との関わりから学問の意義を教える	0.162	0.006	0.051	0.061	0.152	0.041	0.093	0.000
特定の知識・技能を習得させる	0.032	0.142	0.072	0.172	0.093	0.102	0.192	0.092
最先端の研究成果にふれさせる	0.133	-0.023	-0.071	0.034	0.131	-0.015	0.094	0.037

- ▶ 学生に成長をきっかけを与えようとするほど、参加型の方法を取っている。
- ▶ 結果は示さないが、FD(外部講師の講演、授業の相互参観、教員間の討論)を経験した教員ほど、授業の工夫はいずれも熱心にとりいれている。個々の授業の工夫・改善はFDの進展とともに増加している。

# 大学教育改善の方向

## 大学教育の改善の方向：将来の方向

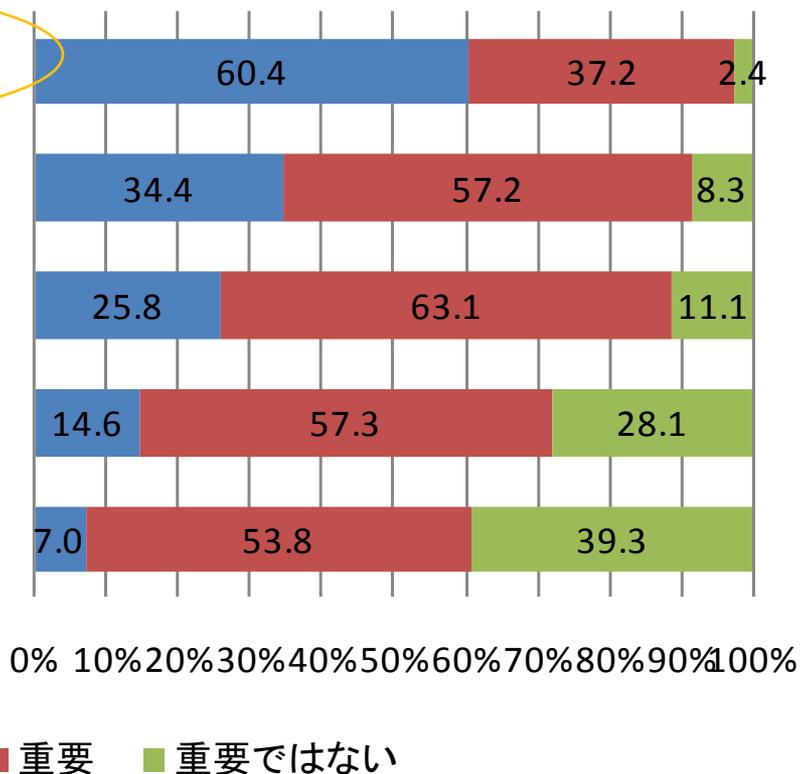
研究室、ゼミなどを通じて、教員や学生間の  
接触を強化する

コミュニケーション能力など授業で獲得する  
べき基礎能力を明確にする

修得すべき知識を標準化し、それに応じ  
てカリキュラムを体系化する

週2回の授業等を通じて学生が個々の授業  
科目に集中できるようにする

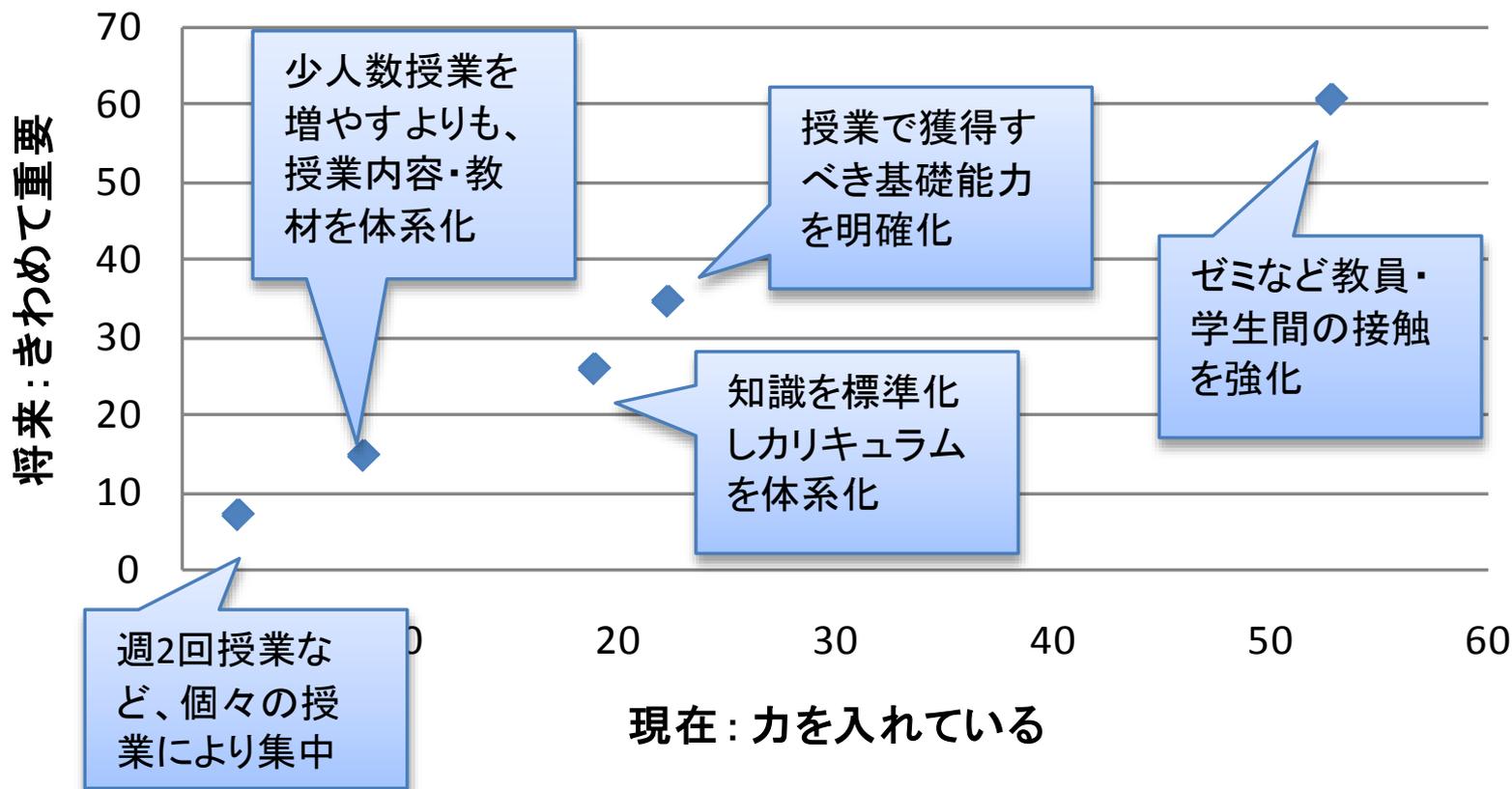
授業内容、教材などを標準化し、T Aなど  
を組織的に用いる



▶ 個人的指導に期待する意見が多い

# 現在の取り組みを将来も必要だと捉えている

## 大学教育の改善の方向：現在と将来



# より良い授業のための条件

## より良い授業にするための必要条件

図書館など学生が自主的に学習する環境

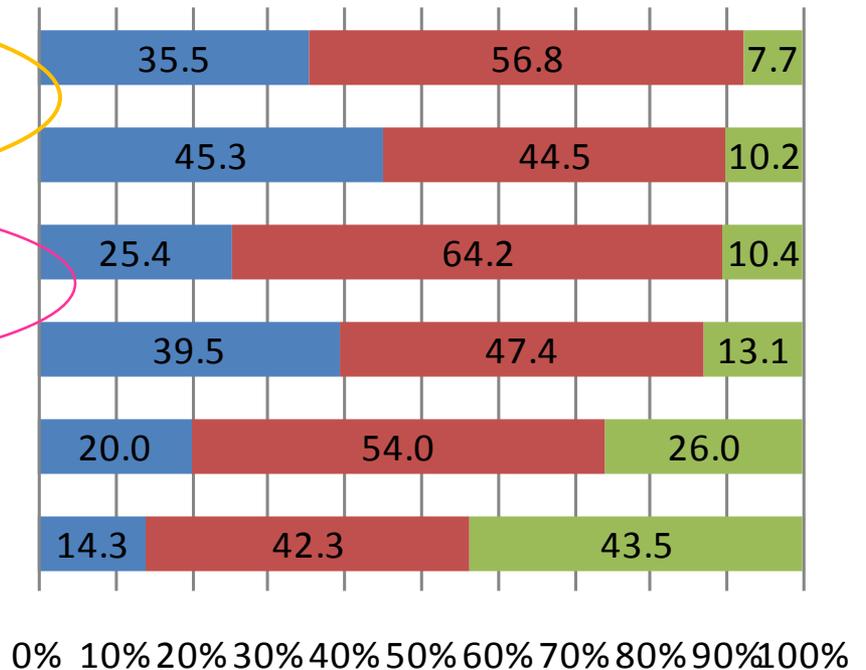
小規模のクラスにする

授業についての教員間の情報・意見交換

担当授業数を少なくして、時間をかける

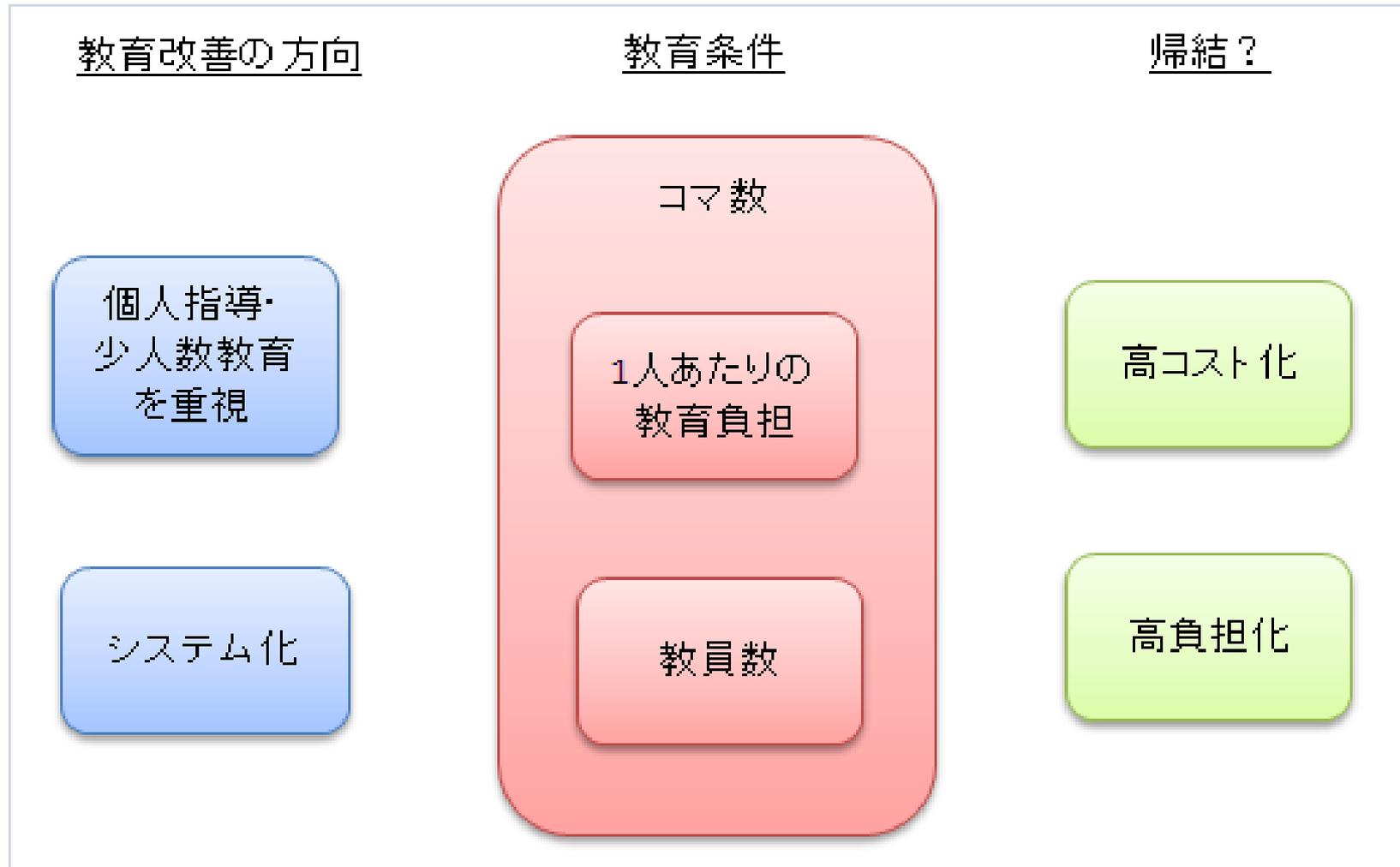
I T 機器や設備の改善

T A、技術者など補助人員



■ きわめて重要 ■ 重要 ■ 重要ではない

# 教育改善の方向性



# 学期中の時間（週当たりの時間、平均値）

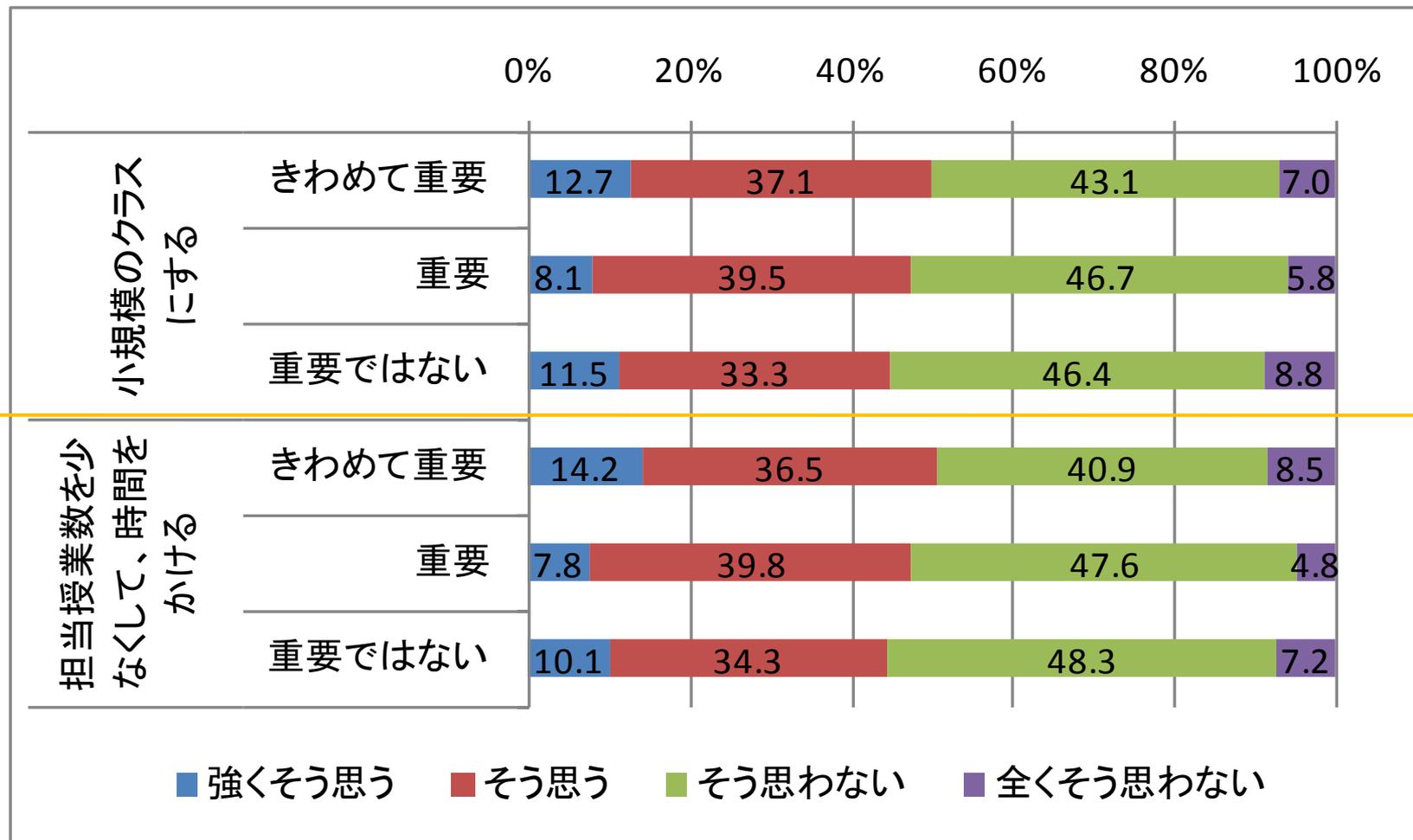
## ●小規模クラスにする

	教育	研究	社会 貢献	管理 運営	合計
きわめて重要	18.3	13.7	4.1	9.2	45.3
重要	16.7	14.0	4.6	9.1	44.4
重要ではない	15.9	15.6	4.5	9.9	45.9

## ●担当授業数を少なくして、時間をかける

	教育	研究	社会 貢献	管理 運営	合計
きわめて重要	18.5	13.6	3.9	9.5	45.6
重要	17.0	13.9	4.4	9.0	44.3
重要ではない	14.8	16.0	5.4	9.0	45.2

# 授業料が高くなっても、高質の教育を行うべきだ



▶ 授業改善の方向性は、授業料に対する考えの違いにはつながっていない。

# 教員から見える世界

---

- ▶ 丁寧な個人的接触を通じた、学生の成長を実感（学生のパネル・データでも示された結果）。
- ▶ →大学教育改善の方向として、個人指導・少人数教育を志向しがち。熱心な教員ほどさらなる努力を必要だと考えるし、教育熱心な教員も増えている。
- ▶ ……しかし、それが大学経営にもたらす影響まではあまり考えていないのではないか。
- ▶ システム化・コーディネート機能をどのように作り出すかも重要なのではないか。大学教育の担い手で、その方向性に最も影響を与えるのは大学教員であるからこそ、この結果は気になる。

# まとめ

---

## ▶ 自律的学習の実態と効果

- ▶ 勉強の面白さ、将来の位置づけなどができると自主的に学ぶようになる。
- ▶ 積極的に大学生活を送ることの効果
- ▶ 授業の効果、教員相談の効果。
- ▶ 自律的学習を身につけたことの効果も確認。

## ▶ 教員からみれば

- ▶ 学生の成長を重視し、授業方法などの改善にも熱心。
- ▶ 大学教育の改善の方向性については、いくつかの軸があるが、個人指導・少人数教育を中心に据えることを望ましいと考える教員が多い。
- ▶ 教員の身の回りの世界で見れば正しいかもしれないが、大学全体として目指すべき方向性といえるのか。ぜひ議論をおこないたい。